

ニューハーフとの出会い

少し日が落ちてきた。暗くなる前に宿に入りたい。山道を走っていると、なおさらそう思う。

由良健一^{ゆ ら けんいち}は慎重にハンドルを握りながら旅館を探していた。なにしろ当てのない旅なので、泊まるとこすら決めていないのだ。

そんな一人旅が好きだった。行く当てもなく、方角だけを決めて車を出すのだ。行き当たりばったりの旅をしていると、思いがけずに、いい景色に巡り合ったり、自分だけしか知らない絶景スポットを見つけたりするのだ。それが楽しかった。

今回も会社に三日間の有休を取り、旅に出てきたのだった。

ありきたりの観光地は好きではなかった。絶対に行かないということもないが、どこに行っても人が多くて落ち着いて観光などできない。由良は人がいない静かな場所を好んでいた。今回もそんなところを求めて山道に入って来たのだ。

山の中には、いい景色が見える場所があったり、小さな店を発見したりと、いろんな楽しみがあり、つつい山道にハンドルを切ってしまうのだ。

そして緑があり、空気が美味しいところも気に入っている。車を降りて風に当たると、本当に癒されて、嫌な日常など忘れてしまうのだ。

彼は現在、四〇歳の独身で、普通にサラリーマンをしていた。十五年勤務しているので、それなりの地位に就き、休みも比較的取りやすい部署に所属していた。仕事もあくせく働くこともなく、どちらかという、のんびり気分で会社にいることが多かった。

普段は土日を利用して車を出すことが多いのだが、今回は二泊三日で少し長旅をしたいと思っていた。いろんな出会いがあり、いろんな景色を見つけることを楽しみに、家を出てきたのだ。

一人暮らしなので気楽なものだった。結婚は一度もしたことがなく、ずっとやもめ暮らしだった。一人の方が気楽でいいと思っている。今後も結婚する気などなかった。結婚なんかすると、こうして一人旅を楽しむことができなくなる。それは何より彼にとっては苦痛だった。

今日も山道に入って風景写真を存分に撮った。それをあとで一枚一枚見るのが楽しみだった。緑が多いというだけでテンションが上がる。湖でもあれば言うことなしなのだが、今日はそれはなかった。

そろそろ空腹を覚え、適当な宿を見つけて入りたいと思っているが、なかなかそれが見つからない。最悪、街に出て、どこかのホテルにでも泊まるしかないかと思っている。

山を走っていると小さな旅館を見つけることがあるのだ。そういうところを探していた。

「自分しか知らない宿」を見つけることが彼には小さな喜びだった。もちろんそういうところには当たりはずれがある。そんなところも面白くて彼は気に入っているのだ。

いつも都合よく旅館を見つけられるとは限らない。見つからないときもある。そういうときは仕方なく街へ出るのだ。今日もそのパターンかと諦めていたとき、道路端に小さな看板を見つけた。

木の枝が垂れ下がって、看板を覆って見づらくなっているが、間違いなく「旅館」の文字が書かれていた。年季の入った看板で薄汚れている。古い老舗旅館であることは間違いなさそう。由良は期待して、心が弾んだ。

彼は道端に車を停めて、その看板に近づいていった。小枝を避けて見ると「旅館のざき」と書いてある。汚れや錆がひどく、辛うじて読み取れたが、「のざき」はたぶん「野崎」だろう。

もしかしたらすでに旅館は閉鎖していて営業していないのではないだろうか？ 由良はダメもとで矢印の方向へ行ってみることにした。しばらく走って見つけられなければ、その日は諦めようと思った。時間はいくらでもある。

細い道に折れていくと、道路を覆うように木がかぶさり、空からの日差しを遮っている。夏場は涼しくていいが、冬場は寂しい場所になるのではないだろうか？ こんな場所に人など来るのだろうか？

そんなことを思いながら車を走らせていると、少し道が開けてきて彼はほっとした。そしてすぐにまた「旅館のざき」の場所を示す看板が見えた。彼はそちらの方に車を入れた。

古びた木造の建物が見えた。老舗の雰囲気があり、由良の好きな趣のある^{たなず}佇まいを見せていたのだ。古くて老舗の風格があるところが彼好みだった。由良はそこに決めたが、肝心なのは予約なしで部屋が空いているかどうかだった。

今までもそんな旅を続けていたが、こういう旅館で満室になっていることはあまりなく、ほぼ予約なしでも泊まれたのだ。

建物の前には数台止められるだけの駐車場があり、彼はそこに車を停めた。荷物を持って、旅館の玄関扉をガラガラと開けた。

木造家屋で出来た玄関ホールには誰もいなかった。上がり框の上にスリッパが二足ほど置かれていて、少し広くなったフロント前には申し訳程度にテーブルとソファが置かれていた。しかし造りはしっかりしていて、木の柱や梁などは頑丈で見ごたえがある。

彼は幽霊が出そうなところを想像していたが、意外とそうでもなかった。

「すいません、ごめんください！」

大きな声で呼びかけると、奥から「はい」という声が聞こえたので安心した。駐車場を見る限り他に車はなく、今日の客はいないのではないかと思っていた。

カウンターの奥の部屋から着物を着た女性が出てきて、笑顔で「いらっしゃいませ」と言ってくれた。

「あの、予約してないのですが、泊まることはできるでしょうか？」